第６回　地域共生社会推進全国サミット in いこま

分科会Ｃ

分科会 C

令和 6 年 10 月 12 日（土）13:00 ～ 14:20

生駒市コミュニティセンター

分野を越境するまちづくり

コーディネーター

近畿大学　総合社会学部　教授
久（ひさ）　隆浩（たかひろ）氏

パネリスト

岡山県英田郡西粟倉村　職員
井上（いのうえ）　大輔（だいすけ）氏

大阪府豊中市社会福祉協議会　事務局長
勝部（かつべ）　麗子（れいこ）氏

いこま未来 Lab　プロジェクトマネジャー
田村（たむら）　康一郎（こういちろう）氏

いこま未来 Lab　第２期生・第３期生
鹿島（かしま）　彬良（あきら）氏

生駒台自治会　会長
向（むかい）　静香（しずか）氏

▽久：

こんにちは。2 日間の長丁場になっておりますが、2 日目の午後の部を開始したいと思います。今スライドに映っているように、この分科会 C のテーマは「分野を越境するまちづくり」です。私の自己紹介も兼ねて、しばらくお話をさせていただければと思います。まちづくりは本来、分野を越えているはずですので、あえてこのテーマに取り組む必要があるのかと感じています。

昨日、山崎亮さんのお話を聞かれた方も多いと思いますが、茨木の「おにクル」について触れられていました。いわゆる複合施設ですね。実は、私が「おにクル」の館長を務めており、「おにクル」は複合施設で、1、2 階が子育て支援センター、3、4 階は文化ホール、5、6 階が地域の図書館、7 階に市民活動センターがあります。これらはすべて市役所の管轄から見ると、いわゆる縦割りの状態です。子育て支援センターは子育て支援課、文化ホールは文化振興課、教育委員会の図書館が入り、7 階は共創推進課が担当しています。誰かがどこかで横串を刺さないと、単なるフロア事のバラバラの施設になってしまうことは最初から明らかでしたので、徹底的に意見交換を行い、今も月に 2 回、全員スタッフが集まって、バラバラにならないよう会議をしています。なぜこの話を持ち出したかというと、私は元々の専門分野が都市計画だからです。30 数年前に都市計画からスタートしましたが、合意形成がとても難しい分野です。例えば、生駒駅前で再開発をやりましたが、利害関係が生々しく出てきます。得をする人は賛成し、損をする人は反対するという非常にドロドロした経験をした中で、こうした利害関係が発生する前から皆でコミュニケーションをとっていればうまくいくのではないかと考え、現場でまちづくりをすることになりました。

そこで見えてきたのは、まちづくりとは一体何かということです。まちづくりの定義は難しいですが、私は非常にシンプルに、1 人 1 人の生活をより良くする活動がたくさんあり、それが合わさったものがまちづくりだと考えています。現場に入って住民の方々と話をすると、教育、福祉、子育てなど、地域の中では様々な問題が起こっています。「私はこの分野は知りません」という話では現場で仕事ができなくなるので、自分なりに様々な分野に手を出し始めました。生駒でも様々な仕事をさせてもらっていますが、昔、大阪府の職員さんと仕事をしている中で、「先生の専門は何ですか？」と聞かれたことがあります。私が返したのは、「いろんな大学の先生がいますが、誰も引き受け手がないときに私に言ってください」ということです。医療の話も多いので、医療に例えるなら、今までの大学の先生は専門医が多かったのですが、町医者も必要だと思っています。とりあえず何でも一緒に考えましょう、というような役割を私が担っています。

まちづくりの現場は専門特化しているわけではなく、市民生活は様々な要素が組み合わさって成り立っています。市役所や専門家が勝手に切り取っているだけで、本来はつながっているはずです。まちづくりを行うということは、境界がないということではないかと思っています。私はしばらく大阪市社会教育委員を務めていました。今は泉大津で子ども子育て会議の委員もしていますが、なぜその話をするかというと、福祉の分野で仕事をすると、市役所の方がよく福祉コミュニティと言いますが、教育の分野で仕事をすると教育コミュニティと言います。そんな話が出たとき、同じ委員の自治会長さんが「お前ら何とかコミュニティって言うけど、コミュニティは一つやで」と言われました。結局、現場や市民側から見ると、分野はないのです。ただ、そういう意味で、分野を超えた交流が本当に市民サイドや地域の中でどれだけできているかというと、課題も残っていると思います。今日は、この分科会 C が一番多様なメンバーが集まっていますので、まとめる私としては大変ですが、まずはお一人お一人がどんな

方か、どんなことをされているのか、約 10 分で自己紹介を兼ねてお話をいただいて、スタートしたいと思います。たまたまかもしれませんが、生駒から遠い方から順に並んでいるので、おもてなしの観点からも、遠い方からお話をいただければと思います。まずは地方創生でもとても有名で、お名前は存じ上げている方もいるかもしれませんが、岡山県英田郡西粟倉村から井上さんに来ていただきましたので、井上さんからよろしくお願いします。

▽井上：

失礼します。岡山県の西粟倉村役場の井上です。よろしくお願いします。

岡山なのですが、とても雪が降る地域です。私の家から車で約 3 分で鳥取県、10 分で兵庫県という県境に位置するまちです。村の面積の約 9 割が山で、小さな村です。イメージとしては、皆さんのまちの一つの小学校区ぐらいと考えていただければと思います。

パワーポイントを作成しましたが、昨日と今日の話を聞いて、村の雰囲気が伝わるようなプレゼンをした方が良いと考え、写真を大幅に追加しましたので、お配りした資料とは少し異なるかもしれません。

今の西粟倉村は、日本の 40 年先の姿と捉えていただければと思います。昨日の講演でも「上り坂を登っているところ」とありましたが、西粟倉の高齢化率のピークは来年です。高齢者人口のピークはだいぶ前に迎えており、現在は高齢者の数が減少しています。介護給付費もすでに下がってきている状況です。

人口のピークは、ベルサイユ条約が締結された 1919 年なので、非常に昔のことです。地方創生についての話がありましたが、2008 年から様々な取組を進めており、国立社会保障・人口問題研究所の人口推計も大きく変化しています。一番の変化は、地域に子どもが増えてきたことです。

私たちは様々な事業を行い、現在は 1,300 人ほどの村ですが、地域の中で新しい事業をどんどん作りたいと考えています。事業の作り方は、個々の「これをやりたい」「これが好き」という思いを実現することから始まります。「あなたの想いを起点に、新規事業を提案します」という募集をかけており、（スライドの写真に映っているのは皆）役場職員です。私もそこにいますが、少し若いです。

人口 1,300 人のうち、約 300 人が他の地域から移住してきた方などで、人口の 2 割から 3 割くらいが地域に縁もゆかりもない方々です。

西粟倉村の考える SDGs は、基本的には環境がベースにあり、中ではなくその上に社会関係資本、さらにその上に経済があります。それぞれの分野から事業を作り、環境にも良く、人がつながる循環ができればいいなと考えています。

地域の中で事業を起こすだけでなく、社会関係資本、人と人とのつながりをもっと強化していく必要があります。そのために「生きるを楽しむ」というビジョンを掲げています。住んでいる人々が「生きるを楽しむ」という状態ってどういう状態だろうということを、今後 10 年で考えていかなくてはなりません。

少し介護に関する話をさせていただきます。住民主体のデイサービスを運営しており、送迎や食事、困っていることのお世話をボランティアで行っています。送迎は近所のおじさんが担当しており、「大変じゃないですか？」と聞くと、「月に 2 回送るぐらいなら全然大丈夫だよ」と答えてくれます。

現在の平均年齢は 90 歳近く、心配していましたが、皆さん元気で、介護給付費やデイサービスに通う方の数は減ったのではないかと思います。食事を楽しみにしている方も多く、特に平均年齢 90 歳を超えると独居の方が多くなるため、デイサービスに行くのを楽しみにしている方が多いです。

こうした行政からの働き掛けもありますが、基本的には「勝手に」何かが始まるような環境がで

きてきていると感じています。村には3Dプリンターやレーザーカッターもあり、使って何かを作りたいという方には自由に使ってもらっています。研修会も開催し、60歳を超えた方々も参加されて花瓶を作ったりしています。

私が作ったものの一つは、遠くから見ると靴が空を飛んでいるように見える下駄箱です。失笑ですか？割と頑張って作ったものです。

地元の人々は雪を嫌がりますが、「雪が降る頃に、子どもや孫が帰ってくれるといいな」という思いで、雪明かりに願いを込めるイベントを行っています。雪の中に明かりを入れて、楽しむイベントです。

また、昔の白黒の写真を集めて、今の風景と合わせて撮影する活動も行っています。おじいさんやおばあさんが嬉しそうにしている姿が印象的でした。

西粟倉にはジムがないため、住民の中には「村にジムを作りたい」と考える人もいます。ある住民が「機械を入れたい」と言ったら、他の住民が「しょうがないな、お金を出そうか」と協力してくれ、あとは月額利用料だけを徴収して公民館を改修して運営しています。

また、サバイバルゲームをしたいという声もあり、赤外線センサーを使ったゲームを住民が勝手に企画することもあります。大人が楽しんでいるうちに子どももたくさん集まるようになりました。

コーヒーを飲んだり、お弁当を食べたりするためのスペースが欲しいという声が上がり、村有林を利用して、みんなで作る活動が進んでいます。

山が9割を占める村の中には、作業道や林道が多くあります。「これをマウンテンバイクで走ったら楽しいのでは？」との提案から、県のサイクルスポーツ協議会と連携し、40キロのコースを走るイベントを開催しました。本当に楽しい体験ができています。

地域の中で「何かをやりたい」と思うことが叶えられるよう、粟倉ファンディングというクラウドファンディング的な仕組みも導入しています。無人駅に博物館を作りたいと言った女の子がいて、45万円ほど集まりました。また、誰かが掲示板に「ミニ四駆大会をしたい」と書いたことがきっかけで大会を開催したこともあります。

近所では、高齢者の方が「草刈りが大変だから芝桜を植えよう」と提案し、今年のゴールデンウィークには最高で1,200～1,300人/日が訪れるイベントも開催されました。草抜き、肥料、植付けなどたくさん作業があるので、地域の高齢者と高校生、大学生、企業の方が一緒に集まって作業する機会が増えており、多くの人が出入りしています。

手作りの映画祭や健康麻雀クラブなど、行政が関与しない活動もたくさん行われています。個人のやりたいことが起点となり、様々な集まりや行動が広がっているのが現状です。

昨日の話を受けて、これからの地域福祉の方向性として、健康や福祉、医療の視点だけでなく、ケア機能を掘り起こし、地域内での活動やコミュニティを増やすことが重要だと考えています。人が大切ですから、個々のやりたいことを発揮できる環境を作ることが大事です。

個々の願いや思いは地域資源として非常に重要ですので、そうしたものをどう引き出せるかが大切だと思っています。生駒でのサミット開催を通じて、参加者の中に種火が生まれ、それが1年後、2年後には焚き火のように燃え上がることを願っています。

以上です。

▽久：

どうもありがとうございました。

井上さんのお話を聞いて、二巡目のときにお願いしたいことがあるので、少し前振りをさせていただきます。井上さんのようにいろいろと仕掛けをして動かしている方は、「勝手に集まってくるんですよ」とおっしゃいますよね。この中でも「や

ってみたい」と思っている方は、勝手にと言われても、第一歩をどう踏み出せばいいのかという疑問が出てくると思います。その辺りの「勝手に」という言葉をもう少し解釈していただければと思います。人が集まるための仕掛けや、何か具体的なアイデアがあれば、二巡目で教えていただければと期待しています。

それでは次に、豊中市社会福祉協議会の勝部さんにお話を伺いたいと思います。先ほど私が自己紹介をさせていただきましたが、実は私が現場に入ったのは最初に豊中市内で、そのときから勝部さんと知り合いで旧知の仲です。勝部さんが有名なのか、豊中社協が有名なのか分かりませんが、全国的に情報をたくさん発信されています。今日はその一端をご紹介いただければと思っています。どうぞよろしくお願いします。

▽勝部：

はい、ご紹介いただきました。大阪の豊中市の社会福祉協議会の勝部です。よろしくお願いします。

さて、今日は「越境する」というテーマでどういう話をすれば良いかと考えたのですが、私の目下のテーマは、福祉という分野で「困ったことを探し、そこを支援する」という発想から、「その人の得意なことから地域に参加できるようなプログラムを作っていくと、結果として、それがまちづくりに変化していく」という発想で動いてます。ですので、少し普段使っている脳とは違うところを使っていただきながら、お話を聞いていただけると良いかなと思っています。

さて、「こんな町中にバナナかよ!!」なんですけど、この１週間ほどの間に、関西テレビで見られた方もいるかもしません。豊中市の路地に地植えされたバナナが咲きました。高さ８メートルのバ

ナナの木が、6 年越しで大きくなりました。定年後の男性たちが一緒にバナナを育て、テレビ局が来るので前日にパッケージ作りを楽しんでいます。先ほどの分科会Ａでお話のあったように、無邪気な定年後のおじさんたちの顔を見たことがありますか？皆わくわくしながら取り組んでいます。このバナナの苗は、実は私たちが関わったごみ屋敷の方が沖縄出身で、お礼に持ってきてくださったものです。色々とドラマがあって、今年見事に咲いたのです。

さらに、今、メダカの販売も行っています。皆さんの中でメダカが好きな方はいらっしゃいますか？必ずいると思います。これは、7 年間不登校だった子が関わることから始まりました。彼のお母さんはとても苦しんでおり、彼自身も人と会うことができずにいましたが、私たちとつながることができました。福祉の支援者が家にやってくると、就労の話や医療の話が出てくると思っていた彼ですが、実際には家の軒先に並ぶメダカの稚魚に夢中になり、どうやって育てているのかを私に説明してくれました。「これって高く売れるのか？」と聞かれたので、ネットで高く売れると答え、「私たちの稼ぎ柱になってほしい」とお願いしました。彼はキョトンとしていました。

私たちはひきこもりの若者たちの居場所づくりを行っています。家に居るよりも、そこに来た方が少しでもお金になる方が良いと考えています。例えば、講演料を寄付したり、彼らが書いた漫画の本を販売して活動費にしたりしています。彼がメダカを販売することで、うまくいけばいいなと思い、お願いしました。彼は７年間外に出られませんでしたが、「いいですよ」と答えてくれました。月１回だけ、誰もいない時間に始めましたが、徐々に整ってきて、４年経って今では彼はプ

ログラミングの会社の社長になりました。

結局、誰とどこでどう出会うかが重要です。ある社会人の大学生が「壁面アートの卒業制作を作りたいので、壁を貸してくれ」と言ってきました。1 人で書くための壁を貸すのは難しいと伝え、実は不登校の子どもたちが絵を描いているので、彼らと一緒に描いてもらったらどうかと提案しました。結果、6 人の子どもたちが参加し、人生で初めて達成感を得たという声がありました。その子は今、定時制高校に通っています。

支援とまちづくりは、制度に当てはめることばかりを考えていたが、それだけでは人は幸せになれないと思い始めています。自閉症の息子を持つお母様たちから、「市役所からは作業所やグループホームなど、生活のためには困らない支援が受けられるが、本人にとっての幸せとは何かすごく迷います」と相談を受けたことがあります。私たちと出会うと、様々な活動に参加するので、そういう関わりをしてもらえるのは羨ましいと言われました。

そこで「お宅の息子さんは何をしているの」と聞くとずっとピアノを弾いていると聞きました。

最近、私たちは「歌声喫茶」を始めました。定年後の男性たちが集まり、ギターを弾いたり、アリスの曲を歌ったりしています。その中に先ほどの自閉症の子が参加し、すごく素敵なピアノを弾いてくれました。彼がピアノを弾くことで、「自閉症の子がこんなピアノが弾けるんだ」と気付いて、そこが福祉教育の場になり、周りの人たちの目が優しくなり、共生の場が生まれました。障がいのある人たちばかりの中にいたけど、皆の中に入って賞賛してもらえたことをお母さんもとても喜んでいました。地域の中で一人一人を大切にし、その人の居場所や役割を考えることが、まちづくりにおいて非常に重要だと考えています。

豊中市は人口 40 万人で、阪神淡路大震災以降、地域の見守り活動が進んでいます。6 年前の大阪北部地震では、4 時間で 1 万 2,000 世帯を見守りました。

そんなまちで、困っている人を見つけて支える活動が、縦割りだったので丸ごと支えるために始まったのが、コミュニティソーシャルワーカーです。これは今の「断らない相談」の原型です。断らない相談を行い、制度がなければ自ら作るということを実践しています。

さらに進んで、一人一人に居場所や役割を作れると、皆が幸せになれると考えています。誰もが取り残され分断されている社会を理解してもらうためには研修よりも、先ほどの「歌声喫茶」のように同じ場所で出会い、知り合い、支えられた人が支える人になるよう考えることが大事です。日本は先進国の中で最も孤立していると言われており、特に男性が孤立しています。男性は地域活動に参加することが少なく、どこにいるのかを研究していました。そして、誰とも関係をもてていない男性をどうするかと考えた結果、最初の「バナナ」の話になっていきます。

地域活動を担っていたのは専業主婦が多く、65 歳以上の世代にはもっと頑張ってほしいという思いから、都市型農園を始めました。私の講演を聞いてくれた先輩が宅地を無償で貸してくれることになり、農園を作り始めました。しかし、男同士の集まりはなかなかうまくいかず、最初は「何を植えるか」の話し合いすら進みませんでした。しかし、様々な特技や知識を持つ人が集まる中で、カカシを作るために設計図を書く人が現れたり、しめ縄作りが得意な人がいたり、移動販売が得意な人が見つかったりしました。「老害」ではなく「老益」です。今、９カ所、１８０人の人が集まっています。また、外国人の支援を行っている中で、修学旅行に必要な「カッパ」という言葉が通じず、レインコートのことを説明する場面もありました。これを定年後のおじさんに話したところ、中国語が話せる人、英語が話せる人が見つかり、今、多文化ボランティアを始めました。今ではボランティアが増え、100 人以上の参加者が集まっています。人の数だけ役割があるという考え方を地域の中心に置くことで、困った事から新たなまちづくりのヒントを得られると信じています。どうもありがとうございました。

▽久：

ありがとうございます。

勝部さんのお話の中で、できる事ややりたい事をどのように引き出し、様々なところにつなげていけるのかという点が一つの柱ではないかと思いました。

先ほどの中盤のお話で、行政が相談に乗ると、メニューが限られてしまうというお話がありましたね。社協だからできる事なのか、行政でも少し仕掛けを変えればできるのか、あるいは向さんもおられますが、自治会の方々もこの中にいらっしゃると思います。社協ではなく自治会でも地域の単位でできる事はあるのか、その辺りを二巡目で教えていただければ嬉しいです。

続いて、田村さんと鹿島さんの二人にお話を伺います。「いこま未来 Lab」という市役所が仕掛けているプロジェクトで、田村さんがコーディネーターを務めておられます。実は田村さんとは 5 年ほど前にお会いしたことがあり、お名前も存じ上げていました。田村さんは、今世界的に流行している広場や公園をみんなで活用しようというプレイスメイキングの第一人者です。私も同じ分野で仕事をしているので、田村さんのお名前は知っていました。コロナ前の 2019 年に生駒のサマーセミナーに参加した際、田村さんが寄って来られて「私もこんな仕事をしています」と名刺交換させていただいたのがきっかけです。

今日は、生駒市民の著名な方ですので、二巡目で田村さんにもお話を伺えればと思っています。まずは第一巡目として鹿島さんにメインで話していただくことになっています。鹿島さんは、今回の登壇者の中で一番若い高校 3 年生です。未来 Lab のメンバーとして頑張ってくださったということで、田村さんと鹿島さんの方にマイクを回しますので、どうぞよろしくお願いします。

▽田村：

ありがとうございます。ご紹介いただきました田村です。よろしくお願いします。

勝部さんや井上さんのお話に引き込まれましたが、今回は高校生チームとしてお話しさせていただきますので、ぜひ応援よろしくお願いします。私自身については、詳細にご紹介いただいた通りで、主にまちづくりに関わってきました。

福祉との直接的な接点はあまりなかったのですが、今回のテーマは「いこま未来 Lab」という事業です。現在、いこま未来 Lab は第 4 期が動いており、コロナの時期から始まったチャレンジです。具体的には、高校生を募集して、彼らがやりたいことを形にしていくプロジェクトです。そのサポート役として、地域の大人として私が関わっています。

少し背景をお話しすると、会場の中に高校生の方はほとんどいないかもしれませんが、子ども会も少なくなってきている現状があります。幼稚園や小学校の段階では地域とつながりがありますが、中学校や高校になるとそのつながりが薄くなってしまいます。学校に毎日元気に通っていても、忙しさの中で地域との接点が持てず、気が付けば定年後にどうしようかということになってしまうかもしれません。

小さな子どものうちに、もっと地域との縦のつながりや斜めのつながりを作りたいと思い、「いこま未来 Lab」というプロジェクトが始まりました。その中で、まだ何もないまっさらな高校生のアイデアを基に、地域の課題にアプローチしていきたいと考えています。この 2 年間の事例紹介を鹿島くんにお願いしたいと思います。それではバトンタッチします。

▽鹿島：

バトンタッチしていただきました。実際に私が参加していた2年間で、どのようなことをやっていたのか、気付きや発見についてお話しさせていただきます。

まず、「いこま未来Lab」は生駒市役所の方や、田村さんのような地域で活躍している大人の方と関わるもので、大学生が高校生と大人のつなぎ役として入っています。高校生が「何をやりたい」という話をする中で、大学生や大人が「こうしたらどうかな」とサポートを行い、事業を進めていくという形です。

事業を進めるにあたっては、チームに分かれ、解決したい課題を考えていきました。私が参加した2期、3期では、全く異なるメンバーと共に活動しましたが、共通した課題が見えてきました。最近ではSNSを中心としたつながりが増え、若い人たちはインスタグラムなどで交流することが多くなり、地域の人と直接会って話す機会が減っています。これが地域の課題ではないかと考え、解決に向けた企画を検討しました。その結果、全く異なる方向性のイベントが生まれました。まず、第2期では「Books&Friends」という本をテーマにしたイベントを実施しました。第3期には「すなっく優しげ」という、会話を楽しむイベントを行いました。

「Books&Friends」は、「本と人とでつながる持ち寄り図書館」というコンセプトで、参加者にお薦めの本を持参してもらい、用意したオリジナルブックカバーを付けてもらいます。カバーにはその本の魅力を自分の言葉で書いてもらい、並べた本を見て気になる本を貸し借りするという形式です。このイベントでは、参加者同士の会話が広がり、本を通じて地域のつながりを作ることができました。

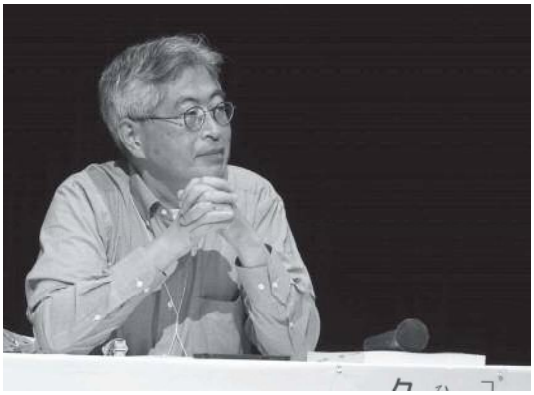
実際にイベントを行った結果、参加者は年代もバラバラで、通りすがりのおじさんが本を寄付してくれたり、地域の盛り上げにつながる流れができたと思います。参加者からは、「どういう本を持ってきたんですかというところから会話ができる空間がとても良い」との声をいただき、本を通じて地域のつながりを作るという気軽な場所から大きなつながりを作ることができる可能性を感じました。

第3期の「すなっく優しげ」は、「すぐにでも仲良くなれる、人が集う空間」という意味で名付けました。高校生がスナックを開き、来た人がすっきりできる空間を提供するイベントです。参加者には悩みを一つ持ってきてもらい、高校生がマスターとしてお話を聞き、共感や傾聴を通じてサポートします。

このように準備を進め、大人の参加者からは「今の学生は何を考えているのか？」といった質問が多く寄せられました。私たちが流行や趣味について話すと、「今はこういうことが流行っているんですか？」と興味を持つ方も多く、参加者同士も含めて世代間の会話が広がりました。地域のつながりは共感を通じて広がっていくと感じました。同じ悩みを持つ人が話をすることで、新しいつながりが生まれ、お互いに共感し合うことができました。2年間の参加を通じて、地域で活躍されている大人と接することで、活気に満ちた大人が近くにいることを実感しました。

いこま未来Labは、学校では経験できない貴重な体験を提供し、地域の友達を増やすコンセプトがあります。多くの学生に参加してほしいと感じています。より多くの人数が集まれば集まるほどアイデアが生まれ、新しいつながりや課題解決につながると思います。

いこま未来Labは非常に魅力的な企画ですので、ぜひ多くの学生に興味を持って参加してほしいと願っています。ありがとうございました。



▽久：

ありがとうございます。

ちょっと私のマネジメントが悪くて、かなり時間が押してしまっています。三巡は多分回せないと思いますので、二巡目でタイムアウトになるかもしれません。1人当たり2分程度でお話しいただくのが限界かなと思っていますが、田村さん、2分でお話しできるか分かりませんが、プレイスメイキングはつながりづくりの一つですので、その辺りを二巡目で簡単にご説明いただければと思います。

それから、鹿島さんには打ち合わせ中にお話しした内容を基に、これだけまちづくりに取り組んでいるから、まちづくりの方に進むのかなと思ったら、「いや、心理学を目指しています」とおっしゃっていました。心理学を目指す鹿島さんが、この未来Labでどんな刺激を受けたのか、個人的な感想で構いませんので、二巡目で教えていただければと思います。

では、一巡目の最後になりますが、生駒の代表ではないと思いますが、生駒台の自治会長をされている向さんにお話を伺います。先ほどからのパネリストの中ではお若く、女性が自治会長を務めるのはすごいなと感じました。向さんは年齢についてはおっしゃいませんが、「いや、若くはないですよ」とおっしゃっていました。他の自治会長さんに比べると、数段若い方だと思います。自治会の「まちのえき」も運営されているとのことで、そのあたりの情報提供をいただければと思います。よろしくお願いします。

▽向：

皆さん、こんにちは。

私は生駒台というまちで自治会の会長をしています、向と申します。世帯数は約600世帯、人数でいうと1,650人ほどです。現在、任期は4年目です。今日ご紹介するためにパワーポイントを作ってきましたが、皆さんの資料は写真がたくさんあって美しいのに対し、私は非常にシンプルで、スライドは4枚しかありません。1年目から行ったことを紹介する内容ですが、ぜひ見ていただければと思います。

まず1年目ですが、自治会にとって回覧の仕組みは本当に資産であり、アナログな良い仕組みだと思います。私も役員になる前は、早く回さなければならないと思い、中身を見ずにハンコだけ押して次の方に回していました。しかし、これでは回覧の意味がなく、とてももったいないと感じました。そこで、回覧を楽しみにしてもらうために新聞を作ることにしました。生駒台新聞という名称で、今年の10月で36号目になります。3年続けてきた結果、半年ほど前から「楽しみにしているよ」と言ってくださる方が増えてきました。少し前にリニューアルしたのですが、回覧の中身や締め切り、地域の「まちかど図書館」に置いてある本の紹介などを伝えられるようにしました。忙

しくて読む時間がない方にも、伝わる内容にと心がけています。

2年目ですが、生駒市内には自治会が128ありますので、自治会長が130人ほどいると思われます。その中で、若輩者の私がここに立っているのは、「まちのえき」という生駒市が推進している事業に取り組んでいるからだと思っています。「まちのえき」は通称で、正式には「複合型コミュニティ」という名前です。複合型と言うからには、何かと何かのハイブリッドでなければなりません。私たちの取組は、非常に若い世代から、一人暮らしで買い物もままならない高齢者まで、様々な世代にアプローチすることが求められます。また、参加者は買い物や遊びに来るお客様であると同時に、ある時は運営するスタッフとしても参加するという、複合的な参加パターンが求められます。こうした事業を進めるのは非常に難しいですが、それに取り組んでいることが、私がここに立っている理由だと思います。2年目には生駒市の担当者が来て、住民にアンケートを取り、ワークショップに参加して補助金を得るために様々な取組を行いました。3年目からは「まちのえき」を実際に運営する年です。一応動画を用意していますので、2分ほどご覧いただければと思います。

2分ほどの動画ですが、「まちのえき」を端的に表した短くて見やすいもので、これを作ったのは班長として参加してくれていたスタッフの方です。私たちの自治会で「まちのえき」を運営する上で大事にしているのは、3年間の補助金の後もきちんと続けられることです。そのためには、任期のある人たちだけが頑張っていてもダメだと思っています。今2年目ですが、任期のない方々にも多くの活動をしていただいています。非常に難しい事業で、素人の集団がいろんな人と関わりながら毎月様々な制約の中で活動するのは大変ですが、大変だからこそ少しずつ仲間が増えていき、絆が深まっていくと実感しています。ここには「大変」と書いてありますが、何より「楽しい」というのが今の実感です。以上です。

▽久：

ありがとうございます。

向さんには、今日「まちのえき」の実践をご紹介いただくためにここに座っていただいていると思います。二巡目では、先ほど申請についてのハードルが高い、続けるのも難しいというお話がありましたが、他の自治会の方がいらっしゃるときに、どのようにその難しさを乗り越えていけるのか、秘訣やポイントがあれば教えていただければと思います。

さて、かなり時間が経過してしまいましたので、先ほど約束していたように二巡目を回していきたいと思います。それでは、井上さんに戻りたいと思います。先ほど「勝手に」という言葉について、本当に勝手に集まるのか、その解説をお願いできればと思います。

▽井上：

非常に難しいテーマだと思いながら考えていましたが、そもそも「やっていいんだ」や「やれるんだ」という（意識を持つことが大切です）。特に村の中で1,500人、一つの小学校区のような規模で見ると、今までは「それはできないよね」と皆が思っていたのですが、新しい図書館ができたときに「集まる、つながる、やってみる」というテーマを掲げ、何かをやってみる掲示板を作ったのが一つのきっかけだったと思います。

いろんな人が、「やりたい事」や「欲しいもの」、さらには「お願いしたい事」を何でも書いていいという環境を整えました。小学生が「スマブラ（ゲーム）大会をしたい」と言えば、「よっしゃ、しよう！」となり、練習のために「コントローラーが壊れている」と言ったら、どこかのおじさんが「買ってあげるよ」と協力してくれたりします。また、移住者の方から「取ってもいい梅の木はどこかにないですか？」といった声もありました。

どこの自治体にもあるような、よく分からない汚れた銅像についても「ちょっと汚すぎるので、

1 回集まって掃除しませんか？」という提案が出たり、お母さんからは「子どもの何々が欲しいので貸してもらえませんか？」というリクエストがあったりと、様々なアイデアが集まり、実際に叶っていくということが続いていました。

昨年からは、山の中で音楽フェスがしたいという声も上がり、実際に音楽フェスを開催する動きが出てきました。「トイレがありません」という問題もありますが、どんどんできるのではという意識が住民の中で広がっていったのが大きいです。

言葉に出せる環境、つまり「こうやりたい」「こんなことができたらいいよね」と口に出せることが非常に重要だと感じています。もう一つ、共生という視点から見ると、私たちの中に高齢者や特定の環境にいる人々が含まれているかどうかで、人は優しくなれるか、突き放すのかが変わると思います。なるべく「私たち」という主語の中に、村民を含めた様々な人が入れるように関わっていけたらいいと考えています。

▽久：

ありがとうございます。それでは、勝部さんには豊中社協で行っていることが、行政や地域でどのように実現できるかについて、一言いただければと思います。

▽勝部：

社協ができて、行政ができないというわけではありません。支援を考えるときに、支える側と支えられる側を二分して捉えてしまうと、専門職は「この人を助けなければならない」と考え、様々な支援を提供し続けることになります。しかし、人は「必要とされる事」が必要なので、その点に着目しなければなりません。そうしないと、助けている人はエンパワーメントされ続けますが、支えられている人はどんどんパワーレスになってしまいます。

支えることと支えられることを両立させることが大切だと思います。この点は先ほどの自治会のお話とも共通していると感じました。自分が全てをやらなければならない、しっかりしなければいけないと思っている支援者のもとには、誰も集まらないように思います。「これができないので手伝ってくれる人を探しています」といった姿勢や、「あなたの力を貸してくれれば、もっと面白い事ができる」といったアプローチが、実は面白いまちづくりにつながるのです。助け上手や遊び上手は、助けられ上手な人でもあると強く感じています。

ぜひ、助けられる事が得意になってください。私がやってあげなければならないという思いが強いと、皆が「お客さん」になって、来ている人たちが実はボランティアとして参加してくれているような構図になってしまいます。このような状況が「尻すぼみ」になってしまうのではないかと考えています。ありがとうございました。

▽久：

ありがとうございます。それでは、田村さんには少し無茶ぶりかもしれませんが、プレイスメイキングとつながりづくりについて解説していただければと思います。

▽田村：

ご紹介いただきありがとうございます。「プレイスメイキング」という言葉についてお話しします。端的に言うと、何でもない場所を愛着の持てる大事な場所にしていくことです。豊中での「豊中あぐり」の写真は非常に分かりやすい例だと思います。本当に何もない空き地だった場所が、いろんな人の関わりの中で変わっていく様子が見て取れます。

公共の眠っている場所をいかに多くの人に開けるかが重要です。そういう意味で、皆が利用できる公共の場所には、もっと多くの可能性があると考えています。都心では投資が行われ、デザイン的に美しくなりますが、必ずしもそうでない例もあります。今日出てきた豊中や西粟倉、生駒のまちのえきなども、その一例です。

暮らしの延長で少し手をかけることによって、

連鎖していくようなものが理想的だと思います。私も生駒の中で、公園を利用するなど、負担をかけずに取り組んでいます。お客様のように全てをやろうとするのではなく、工夫して進めているところです。

この連鎖がまちづくりと福祉の接点になると感じており、未来Labでも高校生に何かを刷り込む活動をしています。

▽久：

ありがとうございます。それでは、鹿島さんには、目指している心理学の方向性と、今回の未来Labがどのような影響を与えたかについてお話しいただければと思います。

▽鹿島：

そもそも未来Labに参加するまで、将来何がしたいのか、どのように大人として社会に関わっていきたいのかについて、あまり考えていませんでした。しかし、未来Labに参加したことで、田村さんのように素晴らしい活動をされている大人の方々と出会い、同じ高校生の中にも自分の芯を持った子や、強い思いを抱いている子がいることに気付きました。

彼らと関わる中で、自分は何がしたいのか、どのようなことが得意なのかを自己分析する機会がたくさんありました。その過程で、困っている人々、例えば発達障がいのために一般的な学校に通えない子どもたちを支援する方向に進んでいきたいという気持ちが芽生えてきました。

このように、様々なまちと絡めながら進んでいけたらいいなという、ふんわりとした希望が出てきました。

▽久：

ありがとうございます。生駒市の担当の方がいらっしゃると、こうした素晴らしい若者を育てていただいたのだなと感じます。

それでは、向さんからまちのえきをこれから始めよう、又は続けようとされている方々に向けて、最後にメッセージをいただければと思います。

▽向：

メッセージになるかどうかは分かりませんが、自治会は専門のセンターではありません。困っている人もいれば、大多数は困っていない人です。困っている人と困っていない人が同じ輪の中にいて、困っている人々も様々な世代にわたり、困り事の種類も多様です。

その人たちが共に生活し、災害が起きた際には助け合うという、共生の考え方が最も大事なコミュニティです。私は常々、市には自治会長を育ててもらって、市役所の方にも自治会長をうまく活用していただける仕組みがあれば良いと思っています。

▽久：

ありがとうございます。

お約束の時間は終わってしまいましたが、私からも3点ほどお話しして締めくくりたいと思います。

まず一点目は「越境する」という話ですが、私自身も含めて、誰がどんな専門家かを理解できたでしょうか。パネリストの活動が、どの分野でということではなく、越境して活動されているということを感じていただければと思います。

二点目は、勝部さんのお話を聞いていて、十数年前の枚方の自治会連合会の会長さんのことを思い出しました。その方としばらくお付き合いしていると、「この人は何もできないのではないか」と感じていました。しかし、付き合ううちに、その方が実はすごい人だと分かりました。つまり、すごい人なのですが、大阪弁で言うと「アホを演じている」ような感じです。できないオーラを出しているのですが、それが周りの人を巻き込む要因になっているのです。この会長が大丈夫かという雰囲気があって、多くの人が巻き込まれていく、そのようなことも必要だと感じました。

三点目ですが、井上さんの最後のコメントにもありましたように、できないということよりもできることを考えようということが重要です。私が

館長を務めている「おにクル」でも同様の考え方があります。指定管理者を含めて100名ほどのスタッフがいますが、細かい事よりも大きな方向性を共有することが大切です。「できません」とは言わないという柱を皆で共有しています。「できません」ではなく、「どうやったらできるか」を一緒に考えようという運営をしています。

市役所にいろいろ言って「駄目です、できません」と言われた経験のある方もいらっしゃるかもしれませんが、そのような方には一つのメッセージをお伝えしています。「何々できますか」と尋ねたときに、「できません」と返ってきたら、もう一言付け加えてください。それは、「できますか」「できません」次に「どうしたらできますか」ということです。この一言が、できませんという答えを不可能にし、一緒に考えていく方向に持っていくのです。いわゆるポジティブシンキングですね。

ポジティブシンキングで考えていくと、いろんな可能性が広がり、実現していくことを改めて感じました。時間が限られている中で、皆さんにどれだけのメッセージをお伝えできたか分かりませんが、どなたかの発言の一部をお持ち帰りいただき、地域での活動の参考にしていただければ幸いです。

それでは、これで時間が来ましたので、パネリストの方々に最後、拍手でお礼を申し上げたいと思います。